



GHIT Fund

Global Health Innovative Technology Fund

Annual Report 2025

GHIT Fund 2025年度年次報告書

Annual Report 2025

GHIT Fund 2025年度年次報告書

GHIT Fund

Global Health Innovative Technology Fund

CONTENTS

代表あいさつ	03
TICAD 9 レポート	05
世界から「見過ごされてきた」病気たち	07
顧みられない熱帯病 (NTDs)を知る リーシュマニア症、アフリカ睡眠病	09
ポートフォリオ	11
臨床試験～薬事申請等	13
Special Feature	15
2025年度投資採択案件	17
研究開発サイトの報告	21
2025年度の活動ハイライト	23
Strategic Plan FY2023-FY2027	27
財務報告	29
リーダーシップ	31
資金拠出パートナー&スポンサー	33
組織概要	34





代表あいさつ

共に挑み、共に歩む 持続可能な健康の未来

揺るぎない信念、着実な歩み

2025年度は、GHIT Fundが掲げた第3次5カ年計画「GHIT 3.0」の折り返し地点となりました。グローバルヘルスを取り巻く環境が大きく変化し、不確実性が増す中で、日本に拠点を置く私たちが果たすべき役割と使命を強く認識した1年となりました。

GHIT Fundの累計投資件数は140件を超え、累計投資額は400億円を上回り、製品開発パートナーは200を超えるまでに拡大するなど、これまでの取り組みの成果が着実に実を結びつつあります。私たちが支援を続けてきた住血吸虫症の就学前児童に対する小児用治療薬は、初めて世界

保健機関（WHO）必須医薬品リストに掲載され、ウガンダ、コートジボワール、ケニアに続き、2026年2月にはタンザニアでの実装研究も開始しました。

また、シャーガス病の簡易診断法「シャーガスLAMP」の製品化に向けた薬事申請や、尿を用いた結核の迅速診断キットの実用化を目指すプロジェクトをはじめ、現在約10件が後期開発段階へと製品開発が進行しており、製品化に向けて着実に進展しています。さらに新型コロナウイルス感染症の後に「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態（PHEIC）」に指定されたエムボックス（旧称サル痘）に対する迅速診断薬の開発支援を行い、パンデミック対応にもスピード感を持って取り組みました。これらの成果は、ひとえにパートナーの皆さま、そして日頃より温かく力強いご支援



Photo credit: Kibuuka Makisa/Candid Local



国井 修
CEO・専務理事

をお寄せくださるすべてのステークホルダーの皆さまのお力添えの賜物であり、深く感謝申し上げます。

グローバルな舞台における躍進

2025年度を通じて、GHIT Fundは様々な国際会議やフォーラムに積極的に参画し、グローバルヘルスのエコシステムを構成する多様な関係者との連携を一層深めました。第9回アフリカ開発会議（TICAD 9）では、ワクチンの製造能力の強化、診断技術のイノベーション、マラリア撲滅などの戦略的なテーマを掲げ、3日間で9つのサイドイベントに登壇・共催しました。TICAD 9における医療分野のイノベーションに対する関心の高さもうかがわれ、政府関係者、国際機関、アフリカ諸国の代表を含む500名以上の参加者と積極的に対話を重ね、国境を越えた知見の共有や新たな協業の機会を育むことができました。その中で、イノベーションから実装までの道のりにおけるパートナーシップの重要性と、研究開発の初期段階からアフリカの現地の声を反映させる意義を改めて確認することができました。

さらに、米国熱帯医学衛生学会（ASTMH）では、世界各地の研究者と最前線の知見を共有するとともに、GHIT Fundの製品開発への投資戦略に対する評価の高まりを実感しました。世界保健総会（WHA）においては、世界から集まった皆さまと共にグローバルヘルスの重要課題を議論する実りある時間を持ちました。グローバルヘルスを取り巻く



中谷 比呂樹 中谷 比呂樹
会長・代表理事

環境に変化が多い中で、日本から世界のパートナーとの連携を強化するGHIT Fundの活動にポジティブなフィードバックをいただき、日本発の研究開発におけるリーダーシップの重要性を感じる機会となりました。

こうした一つひとつの取り組みが、私たちに与えられた「橋渡し役」としての責任と使命をますます明らかにしています。これからも多様なパートナーやステークホルダーと連携し、製品開発の加速化と持続的な変革の実現に向けて、誠実かつ粘り強く取り組んでまいります。皆さまから寄せられる信頼とご期待に真摯にお応えし、価値ある成果を社会へ確実に還元できるよう一層努めてまいります。末永く温かいご支援とご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。





TICAD 9 レポート



GHIT Fundは、2025年8月20日～22日、横浜で開催された第9回アフリカ開発会議（TICAD 9）にて、9つのテーマ別イベントの主催・共催または登壇者として参画しました。3日間の会期中、テーマ別イベントや展示ブースへの参加を通じて、国際的な対話および新たなパートナーシップを構築すると同時に、多様なステークホルダーと連携を図りながら、アフリカのグローバルヘルス分野でのイノベーションと公平な医療の推進について議論を深めました。

医療技術のイノベーションと公平性の新時代

GHIT Fund 投資戦略アソシエイト ヴァイスプレジデントの浦辺隼が登壇、ロイド雪絵ミシェールがMC



ユニバーサル・ヘルス・カバレッジと人間の安全保障の推進における日本の役割

テーマ別イベントでは、GHIT Fundは国連開発計画（UNDP）、新規医療技術のアクセスと提供に関するパートナーシップ（Access and Delivery Partnership: ADP）と共同で、医療技術のイノベーションと公平なアクセスをテーマにしたセミナーを開催しました（後援：外務省および厚生労働省）。登壇者の武見敬三氏（元厚生労働大臣）、中村亮氏（外務省地球規模課題審議官兼大使）をはじめ、国会議員、国連幹部、製薬企業のリーダー、アフリカ各国の規制担当官、大学研究者、外交関係者など、幅広い参加者が集いました。本イベントでは、ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ（UHC）の推進、パンデミック対策、グローバルヘルスの公平性に向けた技術革新のさらなる強化に加え、公平な医療アクセスの確保が中心的なテーマとなりました。あわせて、医療へのアクセスが限られている人々に治療薬やワクチン、診断薬を届けるため強靱な医療システムの構築と戦略的なパートナーシップの重要性が強調されました。

パネルディスカッション「デジタル時代における公平な医療技術の研究開発推進」

パネルでは研究開発とアクセス確保を一体的に考える視点や、アフリカにおける研究体制強化、規制の整合化、デジタル技術の活用、パートナーシップの在り方などが議論され、開発初期段階から医療技術のアクセス確保検討を始めることの重要性も強調されました。また、GHIT Fundと日本政府、UNDPが主導するADPが共同運営する「新規医療技術、アクセスと提供のための協働」（Uniting Efforts for Innovation, Access and Delivery: Uniting Efforts）プラットフォームの活用事例も紹介され、登壇者からは、包括的な資金調達パートナーシップの構築、明確なビジネスモデルによる研究開発ギャップの解消、試験の同時進行で開発を加速する革新的な仕組みへの期待も挙げられました。



日・アフリカ共創で拓く健康と経済の未来： 官民連携の最前線

GHIT Fund CEOの國井修が登壇

- 官民連携を通じた日本のアフリカ医療分野への貢献と「アフリカ健康構想」の進展を紹介
- アフリカ諸国の保健課題解決に資する日本企業等の具体的な取り組み事例（サプライチェーン強化、栄養改善、保健システム整備等）の報告
- 日本政府、アフリカ各国の保健閣僚など関係者が参加し、協力覚書や連携強化を確認

NTDs克服に向けたアフリカとの共創 — 産学官の連携と若者の力

GHIT Fund CEOの國井修が登壇

- 長崎大学、日本製薬工業協会、DNDi Japan、NTDs Youthの会、SDGs・プロミス・ジャパン、GHIT Fund、JAGntdの共催イベント
- 研究から医療現場への橋渡しを実現するイノベーション促進、DNDiの新薬開発実績、地域主導かつ持続可能な医療体制の必要性を強調
- 顧みられない熱帯病（NTDs）の製品開発と民間投資の課題と資金機会に言及、「長崎アウトカム・ステートメント」への継続的なコミットメント提示

保健医療におけるアフリカ・日本 コモン・ビジョン： 健康安全保障と持続可能な成長を共創する

GHIT Fund CEOの國井修がモデレーター

- 「保健医療におけるアフリカ・日本 コモン・ビジョン」を発表
- 従来の援助モデルにとらわれない、公平なパートナーシップの必要性が明確に
- 持続可能な保健財政の重要性、ワクチン・医薬品製造分野における人材育成の緊急性を強調

アフリカにおけるAMEDの取り組み

GHIT Fund CEOの國井修が登壇

- アフリカにおける主要保健プログラム（医療技術実用化、新興・再興感染症研究基盤、地球規模課題対応国際協力）と、複数プロジェクトの成果を紹介
- 製品開発と産業化の間のギャップを埋める重要性を指摘、現場ニーズの早期把握やWHO戦略との連携、初期段階からの産業界参画の必要性を強調

診断領域における課題 — 人道援助の最前線から

GHIT Fund投資戦略アソシエイトヴァイスプレジデントの浦辺隼が登壇

- 低所得国の基本的診断へのアクセス現状の指摘
- アフリカの環境に適応した診断ツールの必要性、人材育成、WHO事前認証による品質保証の重要性を強調
- GHIT Fundの診断技術開発における役割、多層的パートナーシップ連携による共創が、診断技術の普及と持続可能な保健医療アクセスへの鍵

アフリカのワクチン研究開発・ 製造能力の可能性

GHIT Fund投資戦略アソシエイトヴァイスプレジデントの浦辺隼が登壇

- IAVI、国立健康危機管理研究機構と共にアフリカのワクチン研究・製造能力強化への展望をテーマにイベントを共催、アフリカCDC、ダカル・パスツール研究所がアフリカの現状を紹介
- アフリカのパートナーと連携したワクチンプロジェクト「ブルキナファソのGRASとの妊娠マラリアワクチン開発」や「GRASとの赤血球期マラリアワクチン開発」などパートナーシップの重要性を説明

マラリア撲滅のための進むべき道 ～新薬開発を通じた支援

GHIT Fund会長の中谷比呂樹が登壇、ロイド雪絵ミシェルがMC

- マラリア撲滅に向けた創薬をテーマに開催した官民連携イベント。健康・経済・教育への深刻な影響と、資金不足、気候変動など、撲滅の課題を共有
- GHIT Fund支援による長崎大学と塩野義製薬の単回投与型持続性注射剤の開発を紹介
- マラリア撲滅実現には研究開発の革新と現場の理解を融合した持続的な多国間協力が不可欠

UHCの促進とNTDs制圧における 日本のリーダーシップとパートナーシップ

GHIT Fund CEOの國井修が登壇

- NTDs制圧のための連携および投資、各国の主体的なオーナーシップの重要性とアフリカ主導による各国連携の強化の必要性を言及
- 日本とのパートナーシップを通じてNTDs対策や地域主導のヘルスエコノミー構築に取り組む重要性
- UHC実現に向けて、日本の支援と連携を継続

世界から 「見過ごされてきた」 病気たち



マラリア

2024年

感染者数 **2億8,200万人**

2024年

死亡者数 **61万人**

マラリアは、マラリア原虫を媒介する蚊（ハマダラカ）に刺されることによって感染します。感染すると、赤血球が次々と破壊され貧血となり発熱・震えなどの症状を引き起こし、治療が遅れ重症化すると死に至ることもあります。マラリアを引き起こす寄生虫は5種類存在し、なかでも熱帯熱マラリアと三日熱マラリアが最大の脅威となっています。

撲滅への道のり

47カ国と1つの地域がWHOからマラリアが排除された国・地域として認定されています。その進展には地域差があり、アフリカの11カ国だけで世界のマラリア感染者と死亡者数の約3分の2を占めています。さらに気候変動や人道危機、薬剤耐性や殺虫剤への耐性の拡大がマラリア流行地域での感染増加に結びついています。



21の顧みられない熱帯病



ブルーリー潰瘍

土壌や水中に存在する菌が、皮膚の傷や虫刺されなどから体内に侵入して起こる皮膚病で、早期に治療を行わなければ、進行して潰瘍（皮膚の深い傷）となり、骨まで破壊し、変形や機能障害を残すことがあります。



シャーガス病（アメリカトリパノソーマ）

主にシシガメ類の昆虫に刺され、傷口や目・口などから体内に侵入して感染する寄生虫病で、初期段階では発熱、筋肉痛などの軽い症状ですが、感染から数年から数十年後に心筋症や心不全、巨大食道・巨大結腸などをきたし、突然死に至ることもあります。



囊虫症（条虫症）

汚染された食物や水に潜むサナダムシの卵や成虫によって引き起こされる寄生虫感染症で、ほとんど無症状のことが多いが、数か月から数十年後に視力障害やてんかん発作麻痺などの脳の障害を引き起こし、死に至ることもあります。



デング熱・チクングニア熱

マラリアとは異なる蚊（ネッタイシマカなど）によって媒介され、突然の発熱、激しい頭痛や関節痛、筋肉痛などを伴い、発疹が現れることもあります。重症化すると出血やショック症状を伴い、死に至ることもあります。



ギニア虫症（メジナ虫症）

ギニア虫の幼虫を取り込んだミジンコがいる水を飲むことで感染する寄生虫病です。幼虫は腸壁を貫いて腹腔、さらに皮下組織へと移動しながら成長し、最終的に特に足の皮膚を突き破って体外に出てきます。激しく焼けつくような痛みを伴います。



包虫症（エキノコックス症）

寄生虫卵で汚染された食物や水の摂取、キツネやイヌなどの動物との接触によって広がる寄生虫感染症で、肝臓、肺、腎臓、脳などで包虫が発育して様々な症状を引き起こし、死に至ることもあります。



食物媒介吸虫類感染症

吸虫が付着した魚介類や野菜を加熱不十分な状態で食べることで感染し、発熱や腹痛を引き起こし、吸虫の種類によっては肝臓や肺などを侵し肝硬変、呼吸困難などの症状をもたらします。



アフリカ睡眠病（トリパノソーマ症）

ツェツェバエが媒介する寄生虫病で、初期は発熱やリンパ節腫脹、進行すると重篤な神経症状と睡眠障害を引き起こす、致死率の高い感染症です。



リーシュマニア症

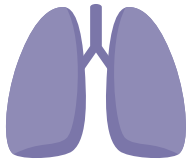
サシチョウバエに刺されることで感染する寄生虫病です。主に皮膚、粘膜、内臓に多様な症状を引き起こす3つの型があり、特に内臓リーシュマニア症は、治療せずに放置すると死に至ることもあります。



ハンセン病

らい菌による感染症で、感染力は極めて低いですが皮膚や末梢神経が侵され、進行すると手足や顔面などに変形や障がいを残すため、偏見や差別の対象になっていた時代・国があります。

結核



2024年

感染者数 1,070万人

2024年

死亡者数 123万人

結核は、単一の感染症としては世界で最も多くの命を奪っている病気です。結核菌は空気中の飛沫を介して広がり、多くの感染者は無症状のまま経過しますが、高齢化や免疫力の低下により発病することがあります。特にHIV/AIDS患者は結核に罹りやすく、主な死因となっています。結核菌は通常肺を攻撃しますが、ほかの臓器に影響を及ぼすこともあります。高齢化や移民により感染者が増加しながら診断・治療がなされていない、不適切な治療などにより薬剤耐性が増加している国や地域もあり、今でも対策が困難な疾患です。

撲滅への道のり

結核による死亡者数は全体として減少しています。2020年以降では初めて、新規患者数も減少に転じた一方で、薬剤耐性は依然として深刻な課題です。2035年の国際目標に達するのが難しい状況です。

熱帯病 顧みられない



2023年

感染者数 15億人

顧みられない熱帯病(NTDs)はウイルス、細菌、寄生虫、真菌、毒素によって引き起こされる21の疾患です。主に熱帯の貧困地域に影響を及ぼし、気候、生活環境、文化・風習、媒介動物などの要因が複雑に絡みあうため、対策が困難です。NTDsは健康だけでなく、社会、経済に壊滅的な影響を与えますが、研究資金が不足しており、効果的な診断や治療薬がないのに見過され、放置されている疾患もあります。

撲滅への道のり

少なくとも1つのNTD排除に成功した国は54カ国に達した一方、100カ国以上で未だ流行している状況です。近年のグローバルヘルス分野への資金支援削減が、停滞や後退を招くおそれがあると考察されています。

出典：WHO(世界保健機関) <https://www.who.int/>
illustration：© Shota Koyano



リンパ系フィラリア症(象皮病)

フィラリアという寄生虫が蚊を媒介して感染し、リンパ節などに寄生する病気。皮膚や皮下組織が線維化、肥厚、角化して手足や陰囊などが象の皮膚のような外観となります。恒久的な障がいや社会的経済的損失をもたらす、偏見や貧困の一因となることがあります。



疥癬

人から人へ感染する寄生虫感染症で、ダニのタンパク質や糞に対するアレルギー反応により、激しい痒みと発疹を引き起こします。



住血吸虫症

川に生息する巻貝が媒介する寄生虫病で、腸や膀胱などの静脈に寄生して産卵し、腹痛や血尿、血便などの症状が現れます。治療せずに放置すると、膀胱がんや肝臓障害を引き起こし、死に至ることもあります。



蛇咬傷

毒ヘビに噛まれるなどして毒が体内に入ると、呼吸麻痺や危険な出血、腎臓障害、組織死を引き起こします。



土壌伝播寄生虫症

汚染された土壌や食物による寄生虫感染症の総称で回虫、鉤虫、鞭虫などがあり、それぞれ腸閉塞や咳、皮膚のかゆみや発育障害、血便や貧血など多彩な症状を引き起こします。



マイセトーマ

農業労働者や裸足で生活する人々に多く見られ、主に足の傷口から侵入する細菌や真菌による感染症です。初期は無痛性の皮下の腫れやしこりですが、進行すると骨や筋肉を侵し、変形、機能障害を起こし、二次感染や敗血症から死に至ることもあります。



ノーマ(壊死性潰瘍性口内炎、水瘡)

極度の貧困や栄養不良、劣悪な環境などによって口腔内で起こる感染症です。菌ぐきや頬粘膜の炎症・潰瘍から始まり、進行すると顔面の組織や骨が破壊され、食事や会話困難となり、敗血症や呼吸困難で死亡することもあります。



オンコセルカ症(河川盲目症)

ブユに刺されて感染する寄生虫症で、激しい痒み、発疹、皮膚の肥厚・萎縮などをもち、寄生虫が眼に侵入すると炎症を起こし、視力障害や失明に至り、感染性失明の世界第2位の原因となっています。



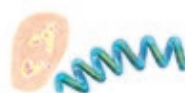
トラコーマ

不衛生な環境で人から人への接触やハエや昆虫が媒介する細菌性の目の疾患で、眼のまぶたや結膜の炎症を繰り返すと角膜などを傷つけ、視力低下や失明に至ることもあります。



狂犬病

狂犬病にかかった動物の唾液が咬傷や傷口から体内に侵入して感染するウイルス性疾患です。咬傷部位の痛みやしびれ、発熱、食欲不振などから始まり、進行すると、興奮、幻覚、麻痺などの神経症状が現れ、最終的にはほぼ100%死に至る病気です。



フランベジア(イチゴ腫)

擦り傷や切り傷を介した皮膚の接触によって広がる細菌感染症で、皮膚、骨、軟骨に慢性的な腫瘍や潰瘍を形成し、外観の変形や身体障がいを引き起こすこともあります。

顧みられない熱帯病 (NTDs)を知る



リーシュマニア症

リーシュマニア症とは

リーシュマニア症はサシチョウバエにより媒介される寄生虫感染症で、現在、世界で約1,200万人が感染している風土病です。皮膚型、粘膜皮膚型、内臓型の3型に分類され、皮膚型は、潰瘍ができ治癒後に瘢痕が残ることが多く、社会的な差別や偏見の要因となる場合もあります。

口、鼻などの粘膜を侵す粘膜皮膚型では、治療を受けない場合、組織が破壊されて重度の外見変形を引き起こすことがあります。最も重篤な内臓型は、脾臓や肝臓、骨髄などの内臓に寄生虫が寄生します。発熱、体重減少、重度の貧血などの症状を伴い、治療を受けなければ致死性的となる病気です。主に医療アクセスが限られた貧困地域の人々に影響を及ぼし、健康格差や医療資源の不均衡と深く結びついた疾患の一つです。



サシチョウバエに刺されることで感染する

Photo credit: James Gathany, CDC Public Health Image Library

感染経路と治療の現状



リーシュマニア症に感染した皮膚

Photo credit: Dr. Abhay Satoskar, Ohio State University

ヒトは、感染した雌のサシチョウバエの刺咬により感染します。サシチョウバエは、感染者から吸血する際に寄生虫を取り込み、体内で発育させた後、次に刺したヒトへと感染を伝播します。感染後の経過は寄生虫種や宿主の免疫状態に依存し、感染しても発症しない場合も少なくありません。現在、本疾患に対する有効なワクチンは存在していません。重篤な内臓型では、静脈内投与薬や経口薬による治療が必要とされますが、吐き気や腎機能障害などの副作用を伴うことがあります。また、治療後も寄生虫の完全排除は難しく、再発の可能性や薬剤耐性の出現が報告されています。

サシチョウバエは温暖で湿潤な環境で繁殖するため、このような環境に近い農村部の住民の感染リスクは特に高いとされています。

リーシュマニア症のワクチンの臨床開発に6.8億円の投資

GHIT Fundは米国オハイオ州立大学および長崎大学が共同で進めるリーシュマニア症の弱毒性ワクチン開発に2015年より投資しています。安全で低価格なワクチン開発を目指し、2025年度には臨床開発に6.8億円の投資を決定しました。流行地域であるブラジルとケニアにおいて健康成人を対象に、開発中のワクチンの安全性および免疫原性を評価するプロジェクトです。2025年7月には米国食品医薬品局 (FDA) により第I相臨床試験開始のための申請である Investigational New Drug Application (IND) が承認されました。この進展はリーシュマニア症克服に向けた大きな一歩となり、これまでヒトに使用可能なリーシュマニア症ワクチンが存在しなかったため、今後の製品開発や早期実用化を加速させることが期待されるプロジェクトです。



リーシュマニア症に感染した皮膚

Photo credit: Dr. Abhay Satoskar, Ohio State University



アフリカ睡眠病(トリパノソーマ症)



ヒトの腕から血を吸うツェツェバエ

アフリカ睡眠病(トリパノソーマ症)とは

アフリカ睡眠病(トリパノソーマ症)は、サハラ以南アフリカのみに分布する吸血性のツェツェバエの刺咬を介して感染する寄生虫感染症です。多くの患者は徐々に進行しますが、一部では数週間で急速に悪化することもあります。寄生虫が血液中で増殖し、発熱、頭痛、リンパ節の腫れなどの初期症状がみられます。病期が進行して寄生虫が中枢神経系へ侵入すると、睡眠・覚醒リズムの乱れ(このため「睡眠病」とも呼ばれる)、朦朧感、運動失調など神経学的症状が出現します。治療が行われない場合、最終的には昏睡状態に至り、命に関わるおそれがある一方で、早期診断と適切な治療により、多くの症例で回復が可能であり、脳の回復不能な損傷も予防できるとされています。

主要な予防法は「刺されないようにすること」

病原体を保有するツェツェバエに刺されると、皮膚から体内に寄生虫が侵入します。性行為による感染例は極めて稀で、握手など日常的な接触でも感染には至りません。

流行地域はサハラ以南アフリカ36か国で、主に農業、漁業、畜産、狩猟などで生計を立てる遠隔地の農村部の人々に大きな影響を与えています。約7,000万人が感染するおそれがあるとされていますが、予防と治療の取り組みにより、患者数は年間28,000人(1999年)から現在約550人まで減少しました。予防の中心は、殺虫剤の散布や、殺虫成分をしみこませた網などの設置、長袖・長ズボンの着用や虫よけ剤の使用で、刺されるリスクを軽減することです。現在、この感染症に対するワクチンはまだありません。



アフリカ睡眠病患者と医師(マラウイ共和国)
© Thoko Chikondi-DNDi

野口英世アフリカ賞

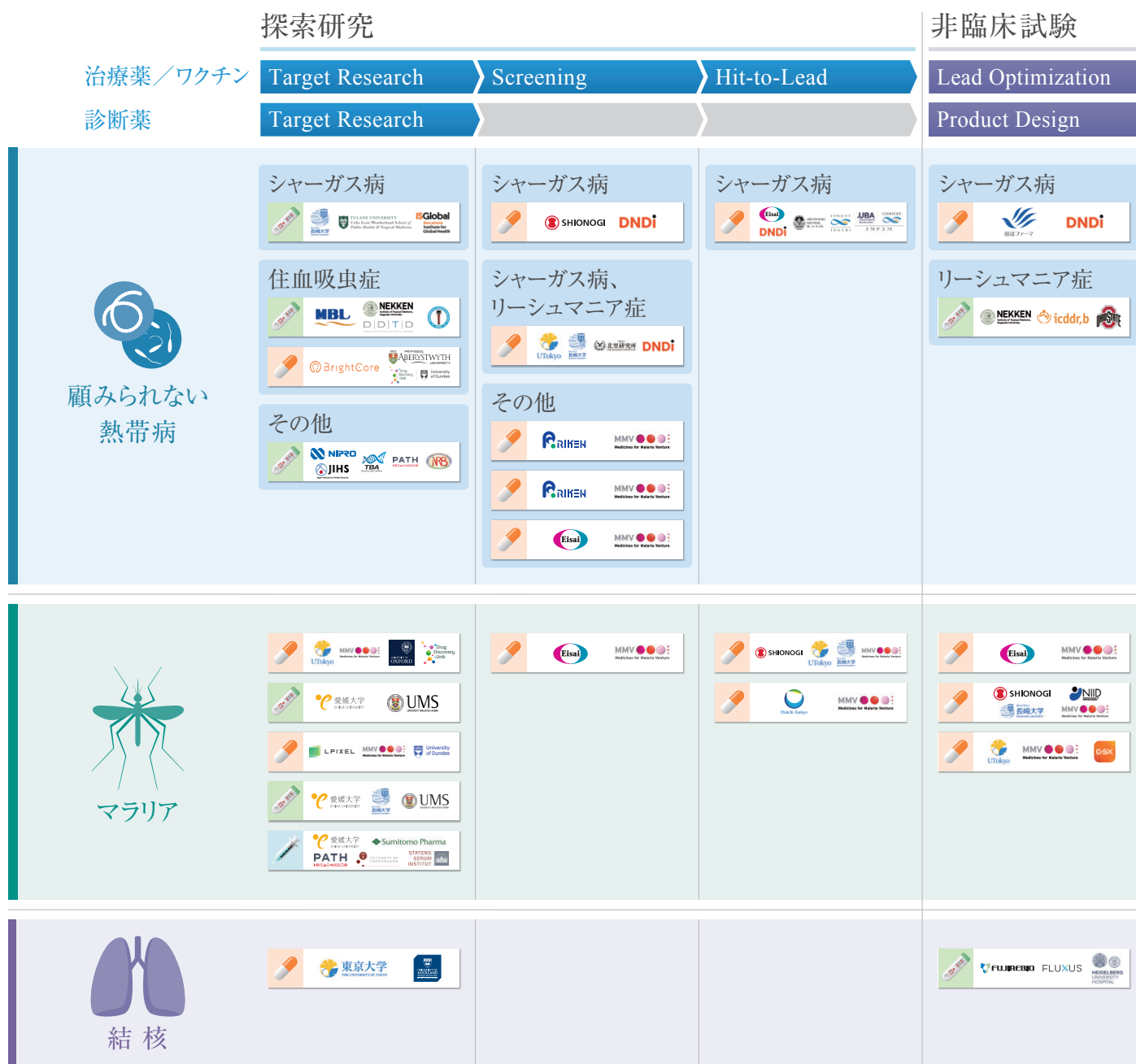


出典: 首相官邸ホームページ

<https://www.kantei.go.jp/jp/103/actions/202508/22noguchishou.html>

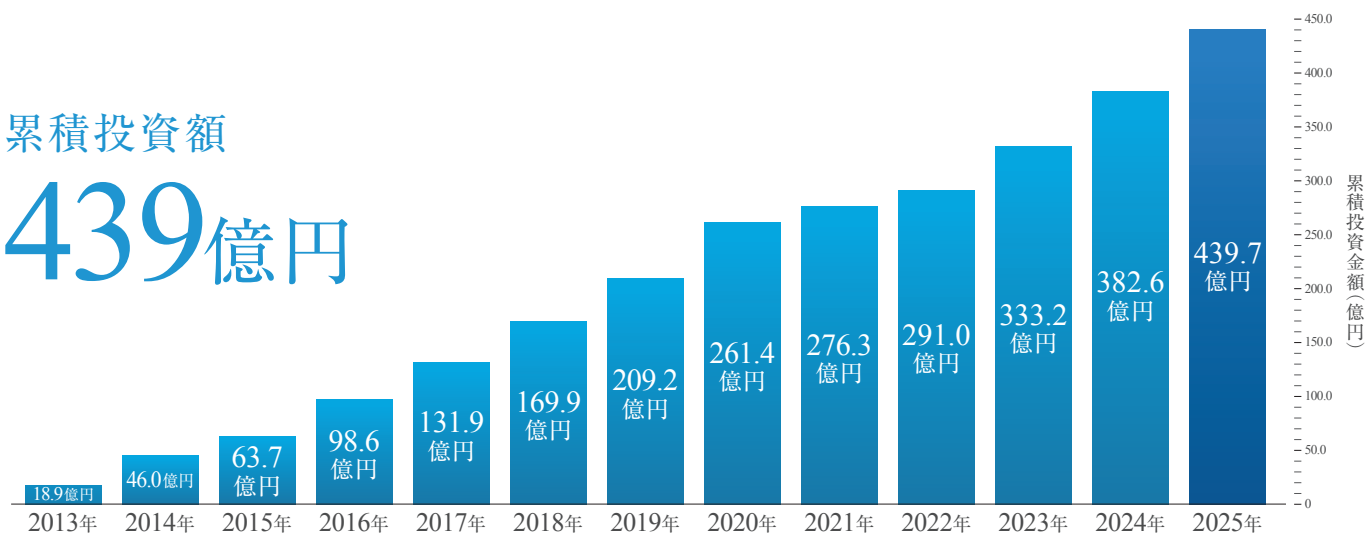
野口英世アフリカ賞は、アフリカの公衆衛生の向上に尽くす研究者や医療者を顕彰する日本発の国際賞です。第5回はGHIT FundのCEO國井修が同賞委員会の委員長を務め、DNDiが医療活動分野で受賞しました。これは、アフリカ睡眠病に対する初の経口治療薬の開発と普及をはじめ、アフリカおよび世界のパートナーとの長期的な協力を通じて、顧みられない熱帯病(NTDs)の治療に大きく貢献したことが評価されたものです。

ポートフォリオ



累積投資額

439億円

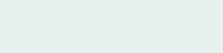


<https://www.ghitfund.org/investment/portfolio/jp>



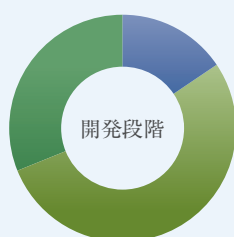
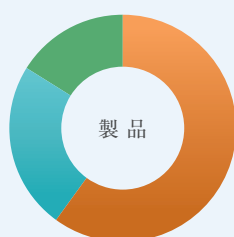
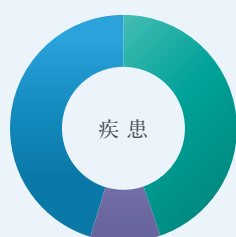
● 診断薬

臨床試験

Preclinical	Phase I	Phase II	Phase III	Registration
Product Development	Product Validation	Product Validation	Registration	
リンパ系フィラリア症、 オンコセルカ症  トラコーマ  土壌伝播寄生虫症 	デング熱  住血吸虫症  リーシュマニア症 		マイセトーマ 	マイセトーマ  シャーガス病 
    				
			 	

2026年3月31日時点

投資概要 (2013~2025年度)



マラリア 44.8%



結核 10.1%



顧みられない
熱帯病 45.1%



治療薬 60.2%



ワクチン 23.8%



診断薬 16.0%



探索研究 15.8%



非臨床試験 53.3%



臨床試験 30.9%

146件
投資案件

213機関
製品開発パートナー
日本 68機関
海外 145機関

2025年度

20件
投資案件

57 億円
投資総額

臨床試験～薬事申請等

GHIT Fundが投資している臨床試験から薬事申請段階の開発プログラムは、世界各地で展開されています。ただし、一部のプログラムは現在準備段階にあり、今後開始予定です。製品を必要とする患者さんの手に届けるため、着実に歩みを進めています。

SJ733

マラリア／治療薬

開発段階: 第IIb相臨床試験
対象国: ペルー

ALAQ-FDC

マラリア／治療薬

開発段階: 第III相臨床試験、承認申請
対象国: ルワンダ、ウガンダ、アンゴラ、ナイジェリア、タイ

LmCen^{-/-} vaccine

リーシュマニア症／ワクチン

開発段階: 第I相臨床試験
対象国: ブラジル、ケニア

ホスラブコナゾール

マイセトーマ／治療薬

開発段階: 第III相臨床試験、承認申請準備中
対象国: スーダン、セネガル、ケニア、インド

SchistoAbRDT-Sm

住血吸虫症／診断薬

開発段階: 製品開発
対象国: ケニア

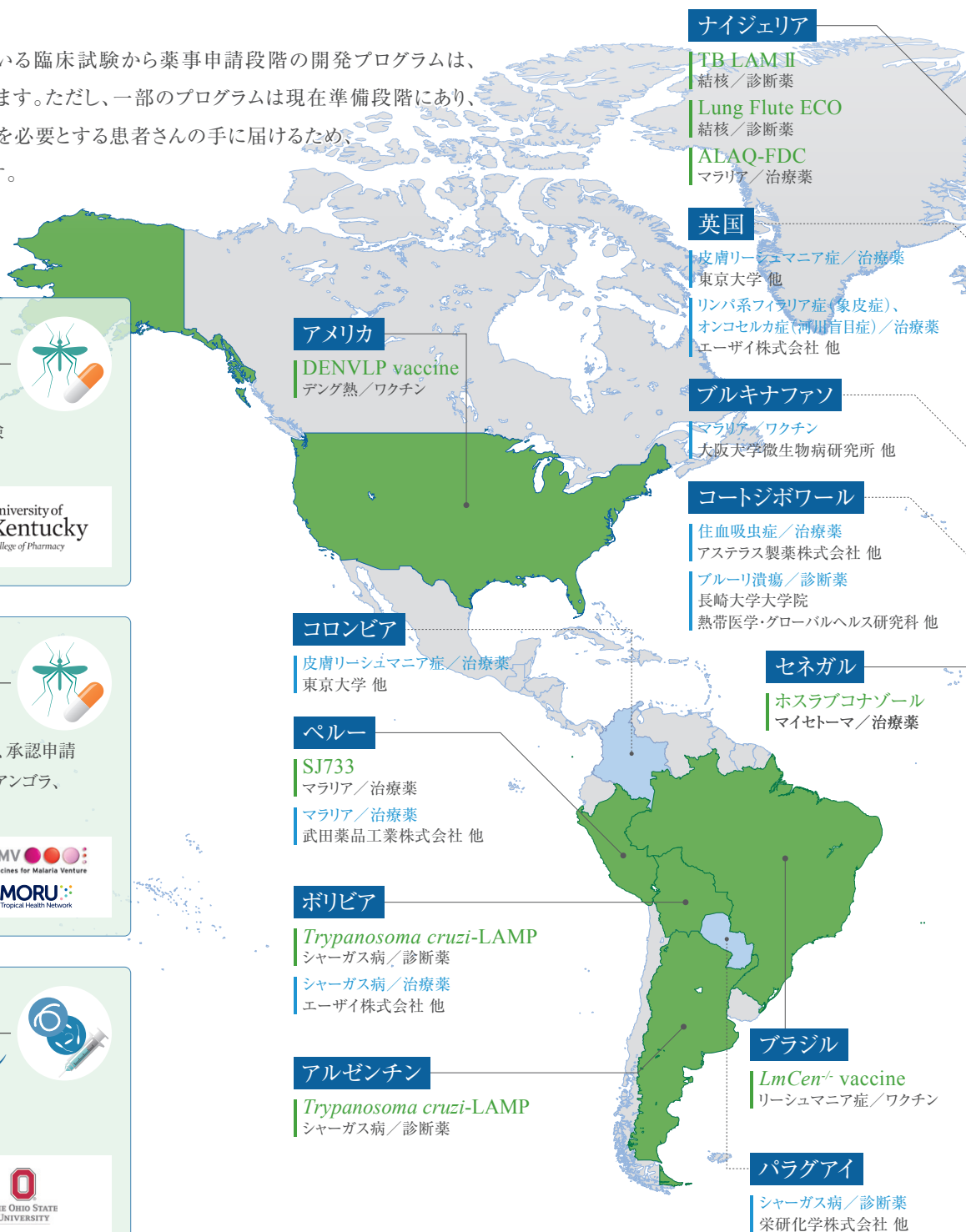
    

DENVLP vaccine

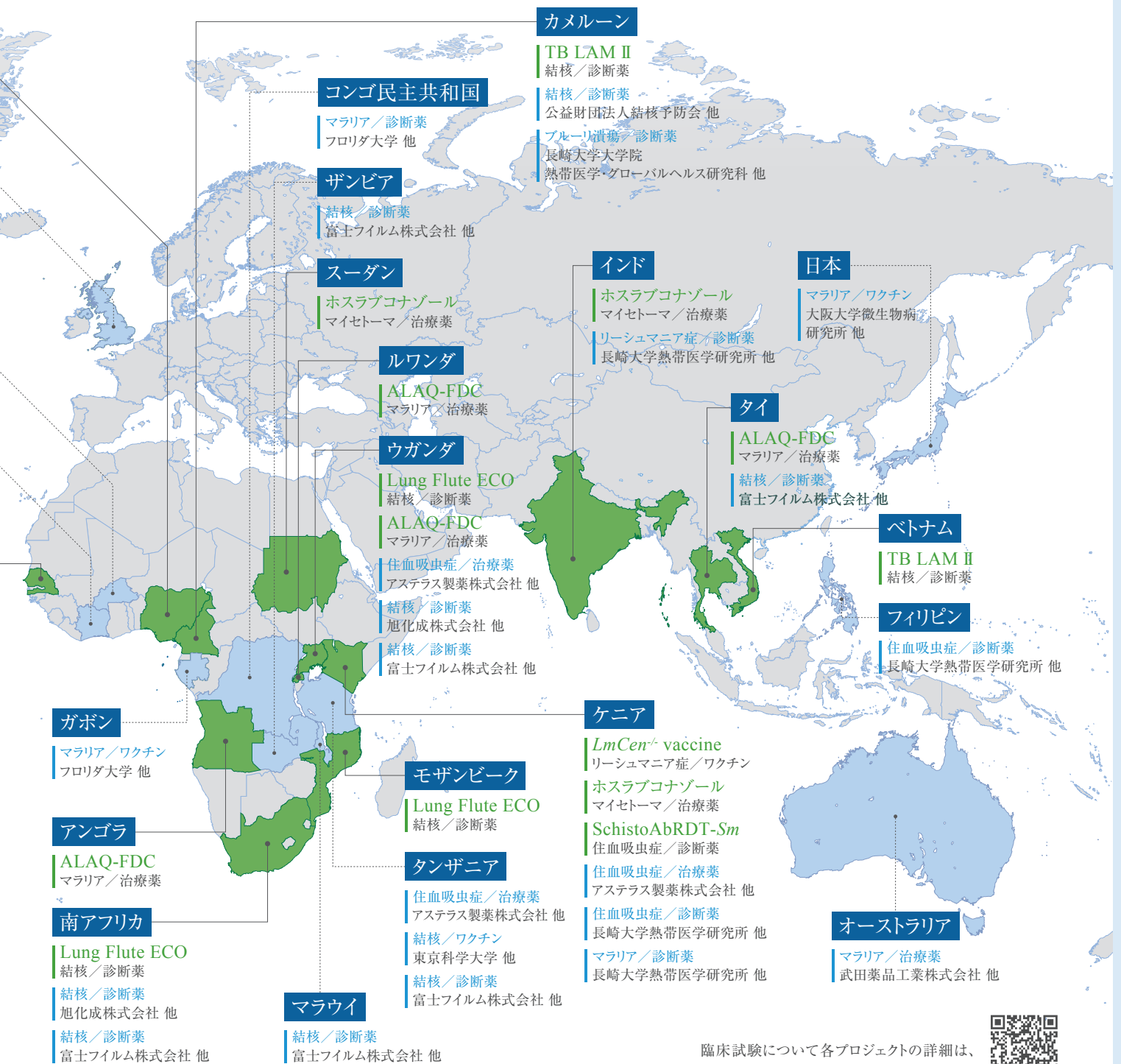
デング熱／ワクチン

開発段階: 第I相臨床試験
対象国: アメリカ



■ = 進行中のプログラム ■ = 投資を終了したプログラム



臨床試験について各プロジェクトの詳細は、
ウェブサイトでご覧いただけます。———▶



Trypanosoma cruzi-LAMP

シャーガス病／診断薬

開発段階: 承認申請

対象国: アルゼンチン、ボリビア



ISGlobal
Barcelona
Institute for
Global Health



CONICET
INGEBI



Sanit



Wiener lab.

Lung Flute ECO

結核／診断薬

開発段階: 製品バリデーション

対象国: 南アフリカ、ウガンダ、モザンビーク



RITA



ACOUSTIC
INNOVATIONS



Stellenbosch
UNIVERSITY



THE AURUM
INSTITUTE

TB LAM II

結核／診断薬

開発段階: 製品バリデーション

対象国: カメルーン、ナイジェリア、ベトナム



FUJIFILM



Stop TB
Partnership



UNOPS



LSTM



CHPR



Zandi Research
Center

Special Feature

住血吸虫症／治療薬

Arpraziquantel

WHOの小児用必須医薬品リストに追加

2025年9月、就学前児童を対象とした住血吸虫症の新たな治療薬が世界保健機関（WHO）の必須医薬品リストに追加されました。これは、開発パートナーがアフリカ諸国でこの小児用治療薬の広範な導入に向けた準備を進める上で各国における規制上の承認プロセスを後押しするための重要な基盤となります。

住血吸虫症は、主にサハラ以南のアフリカで推定約5,000万人の就学前児童が罹患している深刻な寄生虫疾患です。これまで6歳以下の子どもたちに適した治療法が存在せず、感染リスクと長期的な健康被害にさらされていました。今回開発された新しい小児用治療薬は150 mgの水に溶ける分散

性錠剤で、子どもが服用しやすく、気候の影響を受けにくい
ため、流行地域での使用に最適です。

2025年は、ウガンダ、コートジボワール、ケニア、タンザニアで
の実装研究が行われ、子どもたちに薬が届きました。また同
年、タンザニアにおける規制当局の承認も取得しました。こ
れは、タンザニア政府、国連開発計画が主導する新規医療
技術のアクセスと提供に関するパートナーシップ（Access
and Delivery Partnership: ADP）、小児用ブラジカンテ
ル・コンソーシアムやGHIT Fundによる連携の成果であり、
パートナー全員にとって画期的な2025年度の締めくくりとな
りました。

疾患：住血吸虫症

製品：小児用製剤

開発段階：承認申請、アクセス

実施国：ウガンダ、コートジボワール、ケニア、

タンザニアおよびその他のまん延国



Photo credit: UNDP/Kumi Media

ガリアン賞にノミネート

小児用ブラジカンテル・コンソーシアムは2025年ブリ・ガリアン・ブリッジ賞の
公共部門におけるイノベーションカテゴリーにノミネートされました。「製薬業
界のノーベル賞」とも称されるガリアン賞は、科学的イノベーションを通じて
人類の健康の向上に顕著な貢献を果たした業績を称えるものです。



Photo credit: The Galien Foundation

シャーガス病／診断薬

シャーガスLAMP

疾患：シャーガス病

製品：診断薬

開発段階：承認申請

実施国：アルゼンチン、ボリビア



先天性シャーガス病に対する早期診断の推進

シャーガス病は、主に中南米で700万人以上が感染している寄生虫感染症であり、母子感染が大きな課題です。早期診断と速やかな治療が不可欠ですが、現在の診断アルゴリズムでは結果が出るまでに数か月を要し、感染を適時に検出できず見逃すことも多いため、多くの子どもが成人するまで診断されません。成人後は治療効果が大きく低下する一方、乳児期に早期治療を行えば、既存の治療薬であるベンズニダゾールおよびニフルチモックスでは、ほぼ100%の治癒が期待できるため、タイムリーな診断が重要です。

本プロジェクトは、2020年にGHIT Fundの支援を受けて行われた研究で、シャーガスLAMPは顕微鏡を用いた従来の検査法に比べ30%以上の症例を早期検出することが可能です。この成果を踏まえ、試作品のアルゼンチンおよびボリビアでの薬事承認取得を目指しています。LAMP法は、標準

的なPCRと同等の感度と特異度を持ちながら、より簡便で迅速、かつ低コストで実施可能なポイント・オブ・ケア遺伝子診断ツールです。プロジェクトは、ISGlobalが全体のコーディネーターを務め、栄研化学およびWIENERが薬事承認申請を準備し、INGEBIとSANITが各国での薬事申請や臨床検証を支援する体制で進められています。



結核／診断薬

FUJIFILM SILVAMP TB LAM II

疾患：結核

製品：診断薬

開発段階：製品バリデーション

実施国：カメルーン、ナイジェリア、ベトナム



結核診断の格差解消へ 革新的な検査の導入に向けて

結核は世界で毎年約1,000万人以上が罹患し、120万人以上の命を奪っている深刻な感染症です。現行の喀痰検査に基づく診断では、HIV感染者や小児など、喀痰を採取できない患者を見逃すことが多く、医療資源の限られた地域では300万人以上が診断されないまま取り残されています。診断がなければ、これらの患者は治療を受けられず、病状の悪化や感染の拡大につながります。そのため、早期診断の確立が極めて重要です。

本プロジェクトでは、GHIT Fundの継続的な投資をもとに、尿中のLAM抗原を検出する結核迅速診断テスト「FUJIFILM SILVAMP TB LAM II」と尿濃縮装置を組み合わせた性能評価を行います。この革新的な診断法により、喀痰採取が不要となり、HIV感染の有無に関わらず、重症患者や小児を含む幅広い層で診断精度を大幅に向上させる可能性があります。

本プロジェクトは、ストップ結核パートナーシップが富士フイルム株式会社、リバプール大学熱帯医学校、さらにカメルーン、ナイジェリア、ベトナムの研究機関と連携し、臨床的有効性と実現可能性の評価を推進しています。



2025年度投資採択案件

T2024-153

マラリア／診断薬

TRP



ZOO-RDT: 東南アジアにおける人獣共通感染性マラリアの診断のための新規バイオマーカーおよび迅速診断検査用試薬の検証

愛媛大学、マレーシアサバ大学

人獣共通感染性マラリアの病原体の一つであるサルマラリア原虫は東南アジア全体で症例数が急増していますが、現在、特異的な迅速診断検査は存在しておらず、患者が治療を受けるまでのアクセスが遅れる原因となっています。本プロジェクトは、特異的な迅速診断検査用試薬を開発し、患者管理の改善に貢献するとともに人畜共通マラリアによる負担の軽減に寄与することが期待されています。



リチャード カルトン 教授
(愛媛大学)



T2025-157

マラリア／ワクチン

TRP



PfCSPおよびPfRipr5を基盤とした熱帯熱マラリア多段階ワクチン候補の開発

PATH、愛媛大学、住友ファーマ株式会社、Statens Serum Institut、コペンハーゲン大学

実用化されたマラリアワクチンは問題があり、次世代ワクチンの開発が急務です。本プロジェクトでは、感染阻止と赤血球期の両方に有効なワクチンを開発します。製剤化した多段階ナノ粒子ベースのマラリアワクチン候補の前臨床データを得ることが目的です。ワクチン製造と製剤化プロセスの簡略化により、効果と持続性が増強され、製造コスト削減と冷蔵保存が不要となります。



カタグンマイヤー 博士
(PATH)



T2024-268

マラリア／治療薬

TRP



AIを活用した Cell Painting アッセイによる抗マラリア化合物作用機序解析プラットフォームの開発

Medicines for Malaria Venture (MMV)、エルビクセル株式会社、ダンディー大学

既存の耐性メカニズムに影響されない作用機序を有する新たなマラリア治療法の開発が求められています。本プロジェクトは、最先端の細胞イメージングとAIによるパターン認識を活用し、ハイスループット成長阻害アッセイとCell painting 解析技術を組み合わせた抗マラリア化合物探索プラットフォームを開発します。ヒット創出プロセスにおける時間とコスト短縮が期待されます。



プロフラー 博士
(MMV)



T2024-276

マラリア／診断薬

TRP



ゼロから設計する人工タンパク質を使った高感度で信頼性の高いマラリア迅速検査開発

愛媛大学、長崎大学熱帯医学研究所、マレーシアサバ大学

現在使われているラテラルフローアッセイ(LFA)によるマラリア迅速検査は、感度および特異性に限界があります。本プロジェクトは、抗体の代わりに新しい人工タンパク質を利用した検査用試薬を開発し、主要な病原体の熱帯熱マラリア原虫(Pf)だけでなく、ほかのマラリア原虫や新興病原体である二日熱マラリア原虫(Pk)も高感度に検出できる迅速診断検査(RDT)の開発を目指します。



リチャード カルトン 教授
(愛媛大学)



T2025-151

住血吸虫症／治療薬

TRP



AIH2L: 人工知能を活用し、新しい抗住血吸虫薬のヒット化合物からリード化合物候補を特定するための戦略

アペリストウイス大学、BrightCore株式会社、ダンディー大学

住血吸虫症の治療薬プラジカンテルに代わる新治療薬の開発が急がれています。AIは、コスト・時間・資源の制約という課題を解決し、新薬開発を前進させる可能性を持ちます。本プロジェクトの目的は、住血吸虫の複数の段階に有効な化合物シリーズを見つけ出し、創薬の次の段階であるヒット・トゥー・リードに進めることです。次世代の抗住血吸虫薬候補を生み出す新アプローチを開発します。



カール F ホフマン 教授
(アペリストウイス大学)



T2024-253

結核／治療薬

TRP



ゲノムマイニングによる新規抗結核抗生物質の探索

オークランド大学、東京大学

結核の原因菌(結核菌)の多剤耐性(MDR)株や広範囲薬剤耐性(XDR)株の出現により、新規抗結核薬の開発が急務となっています。本プロジェクトでは、結核菌の主要な代謝経路を特異的に標的とする二次代謝産物を同定し、結核菌の生存と発病に不可欠な主要代謝経路を標的とする新規抗菌剤の発見を目指します。さらに研究成果を臨床応用し、結核患者に新たな治療選択肢を提供します。



ガダー バシリ 博士
(オークランド大学)





H2025-102

マラリア／治療薬

HTLP

第一三共の化合物ライブラリから見出された複数のライフサイクルステージを標的とする新規 PfPFN (プロフィリン) 阻害剤の Hit-to-Lead 研究

Medicines for Malaria Venture (MMV)、
第一三共株式会社

第一三共の保有する化合物ライブラリから見いだされたヒット化合物のうち、最も有望なものは、強力な抗マラリア活性を有し、新しい作用機序を持つことが示されました。本プロジェクトは、GHIT HTLP/MMV Early Lead Criteria (初期リード化合物基準) を満たす化合物シリーズの開発を目指し、化合物のデザイン・合成・評価のサイクルを実行します。



ブノワラー 博士
(MMV)



G2022-210

マラリア／治療薬

PDP

抗マラリア薬を指向したProlyl tRNA 合成酵素阻害薬の開発

Medicines for Malaria Venture (MMV)、
GlaxoSmithKline Investigacion y Desarrollo, S.L.,
東京大学

マラリアは既存療法への耐性拡大が懸念されています。プロリル-tRNA シンターゼ (PfProRS) は、蛋白質合成に必須の酵素で、マラリアに対する臨床的に検証された標的です。これを阻害することでマラリア原虫の増殖を抑えることが期待されます。本プロジェクトはMMVの治療薬または予防薬の基準を満たす前臨床候補化合物創製のための後期リードを同定することを目指します。



スティーブンブランド 博士
(MMV)



G2025-112

マラリア／ワクチン

PDP

三日熱マラリアの感染と伝搬を阻止するマルチステージmRNAワクチン製剤の開発

マヒドン大学、愛媛大学、チュラロンコン大学

三日熱マラリアは、寄生虫が肝臓内で休眠状態になった後、再活性化する特徴があり、根絶において大きな課題です。現在、この病気に対するワクチンはありません。本プロジェクトの目的は、三日熱マラリアの感染と伝搬を減少させるマルチステージmRNAワクチンの開発です。感染地域の医療費の大幅な削減への寄与、長期的健康被害の防止を実現し、生活の質の向上が期待されます。



ジェツモン サタボンコト
プラチュムスリ 教授
(マヒドン大学)



H2025-101

シャーガス病／治療薬

HTLP

シャーガス病治療のためのホスホジエステラーゼ阻害剤のヒット化合物からリード化合物への最適化

エーザイ株式会社、Drugs for Neglected Diseases initiative (DNDi)、ラ・プラタ国立大学、Fundación Instituto de Investigaciones en Ingeniería Genética y Biología Molecular, Instituto de Investigaciones en Microbiología y Parasitología Médica



シャーガス病の新規治療法の開発は喫緊の課題です。現在使用されている薬剤は、慢性期の感染に対して十分な効果を示さず、多くの副作用があります。本プロジェクトでは、新規作用機序を持つ薬剤候補の具現化を目指します。DNDiが推奨するシャーガス病のリード化合物基準に基づき、新規標的に作用する新たなヒット化合物を最適化し、パイプラインに追加します。これにより、短期間の経口投与で治療可能な新薬の開発を成功に導く可能性を高めます。



G2024-201

マラリア／ワクチン

PDP

赤血球期マラリアワクチン候補 SE36/cVLP のバイオ製造と前臨床開発

欧州ワクチンイニシアチブ、大阪大学微生物病研究所、コペンハーゲン大学、AdaptVac、テュービンゲン大学病院、味の素株式会社、ノーベルファーマ株式会社



小児のマラリア予防において、2種類のスポロゾイト期ワクチンが認可され期待が寄せられていますが、赤血球期のマラリア原虫を制御し、持続的な効果を確保する必要があります。本プロジェクトは、熱帯熱マラリア原虫のSE36抗原に基づく赤血球期ワクチンの開発を進めるもので、新規製剤 SE36/cVLP ワクチンにより、防御効果のさらなる向上、商品の低廉化を実現していきます。



G2025-102

マラリア／治療薬

PDP

単回経口治療薬および予防薬の双方への展開の可能性のある新規作用機序抗マラリア薬の前臨床研究

Medicines for Malaria Venture (MMV)、
田辺ファーマ株式会社、ジョージア大学



MMVの定める後期リード化合物基準を満たす MMV172は、次世代の抗マラリア薬として有望な特性を有します。本プロジェクトの目的は、第一には予防薬を標的としたMMV172のIND申請のための前臨床開発試験の完了、第二には、三日熱マラリアの再発にも有効な単回経口治療薬 (SERCAP) または長時間作用型注射剤予防薬のいずれかの後期リード化合物を1つ以上創出することです。



2025年度投資採択案件

G2024-101

リーシュマニア症／ワクチン

PDP



cGMPグレードLmCen⁺ワクチンの第I相臨床試験における安全性および免疫原性の評価

オハイオ州立大学、長崎大学

リーシュマニア症は世界で1,200万人以上が罹患し、毎年約200万の新規患者が発生する顧みられない熱帯病(NTD)です。現在、ヒトに使用可能な予防・治療ワクチンは存在しません。本プロジェクトでは、CRISPR-Cas9技術で開発された新規の遺伝子編集弱毒生ワクチンLmCen⁺の安全性と免疫原性を第I相臨床試験により評価し、予防ワクチンの研究開発を進めます。



アベイ サトスカー 教授
(オハイオ州立大学)



G2025-101

土壌伝播寄生虫症／診断薬

PDP



糞線虫ラピッドテスト・プラス(SsRT+)：新しい簡便化された迅速診断検査によるWHOの糞線虫症制御プログラムの支援

Drugs & Diagnostics for Tropical Diseases (DDTD)、株式会社医学生物学研究所、IRCCS Sacro Cuore Don Calabria Hospital、QIMR Berghofer Medical Research Institute、Fundacion Mundo Sano、Big Eye Diagnostics, Inc. マルコ A ビアモンテ 博士 (DDTD)



糞線虫は世界で約3~6億人が感染する土壌伝播寄生虫です。本プロジェクトの目的はSsRT+と呼ばれる簡便で低コストなPOC検査を提供することです。この検査は糞線虫診断のための新しいターゲットプロダクトプロファイルの主要基準をすべて満たし、糞線虫症の制御プログラムの実施可否や対象地域に対し信頼性の高い意思決定を支援することを目指しています。



G2025-121

シャーガス病／診断薬

PDP



シャーガスLAMP：先天性シャーガス病(経胎盤感染)新生児の早期治療のための簡便診断法(ポイントオブケア試験) - プロタイプから製品化へ

Barcelona Institute for Global Health (ISGlobal)、栄研化学株式会社、Consejo Nacional de Investigaciones Científicas y Técnicas - Instituto de Investigaciones en Ingeniería Genética y Biología Molecular "Dr. Héctor N. Torres", Fundación Salud Naturaleza Integral, Wiener lab



フリオ アロンソ
パデージャ 博士
(ISGlobal)

シャーガス病は母子感染が公衆衛生上の課題ですが、効果の高い治療薬が存在するため、早期診断による早期治療が非常に重要です。本プロジェクトの目的は、先天性シャーガス病を迅速に検出するシャーガスLAMPの製品としての登録です。WHOのNTDs 2030ロードマップやPan American Health Organizationの母子感染制圧イニシアチブへの貢献が期待されます。



G2025-211

マイセトーマ／治療薬

PDP



真菌性マイセトーマに対するホスラブコナゾールのグローバル試験と薬事承認：研究成果を患者のもとへ届けるために

Drugs for Neglected Diseases initiative (DNDi)、エーザイ株式会社



ボルナ ニャオケ
アノケ 医師
(DNDi)

ホスラブコナゾールは良好な安全性と有効性が示唆されており、忍容性が高く、患者にとって使いやすいことから、真菌性マイセトーマの新たな治療選択肢として期待されています。スーダンでの第II相臨床試験結果を踏まえ、本プロジェクトでは、セネガル、ケニア、インドのまん延地域で臨床試験を実施し、有効性・安全性・薬物動態を評価するとともに、WHO事前認証取得に向けた準備を進めます。



G2025-125

エムボックス／診断薬

PDP



Mpox検出のためのIso-PAS技術の開発と性能評価(Iso-PAS Mpox)

ニプロ株式会社、株式会社TBA、国立健康危機管理研究機構、PATH、国立生物医学研究所



吉田 博氏
(ニプロ株式会社)

現在利用可能なエムボックスの検査は、大都市を中心に提供されており、地方の施設の場合、検体を大都市の検査室に輸送する必要があります。本プロジェクトでは、安価、簡便な遺伝子検査法であるIso-PAS法を用いて、エムボックスのクレードIとクレードIIを区別できる検査キットの開発と評価に取り組みます。将来的にはWHOの緊急使用リスト(EUL)登録を目指します。





G2023-212

結核／診断薬

PDP

FUJIFILM SILVAMP TB LAM IIおよび尿濃縮デバイス(UCD)の診断精度の多施設試験

ストップ結核パートナーシップ、富士フイルム株式会社、リバプール大学熱帯医学校、健康増進研究センター、Friends for International TB Relief, Zankli Research Centre, Bingham University Nigeria



ジェイコブ クレスウェル 博士
(ストップ結核
パートナーシップ)

結核検査は喀痰に基づきますが採取は容易ではなく、真の非喀痰POC検査は不十分です。富士フイルムが開発した尿中の低濃度のLAM抗原を検出する結核迅速検査は、非喀痰POC検査として大きな可能性を示しています。本プロジェクトは、富士フイルムのSILVAMP TB LAM IIと感度のさらなる向上を目指し、開発中の尿濃縮装置の性能に関し、WHO推奨取得に向けたエビデンスを提供します。



G2024-105

結核／診断薬

PDP

ラングフルートECO(Lung Flute ECO)による地域主導型ユニバーサル結核検査の推進(FLUTTE):小児、医療従事者、HIV感染者を対象とした比較試験による検証

公益財団法人結核予防会結核研究所、株式会社アコースティックイノベーションズ、アントワープ熱帯医学研究所、The Aurum Institute、ステレンボッシュ大学、Instituto Nacional de Saúde、World Alliance for Lung and Intensive Care Medicine in Uganda



御手洗 聡 教授
(公益財団法人結核
予防会 結核研究所)

結核の検査において喀痰を自力で出せない人が数多く存在します。ラングフルートECOは、短い呼吸訓練で喀痰を誘発する安全・低コストの製品です。電力・薬剤・医療設備を必要とせず、持続可能な検査を実現します。本プロジェクトの目的は、2027年までにこの製品のWHO承認を得るための科学的根拠を確立することであり、結核診断の最大のボトルネックを解消します。



S2025-111

マラリア／治療薬

Screening

マラリアを標的としたセリンヒドロキシメチルトランスフェラーゼ(SHMT)の阻害

エーザイ株式会社、Medicines for Malaria Venture (MMV)



T2024-155

顧みられない熱帯病(NTDs)／診断薬

Strategic Innovation and Market Assessment Award

日本の体外診断・医療機器の開発・製造元および、軽視されがちな熱帯病の診断検査の世界的な状況のマッピング

株式会社富士経済、Foundation for Innovative New Diagnostics (FIND)

※本プロジェクトは2024年度に開始し、2025年度に完了した後、最終報告書をWEB上に公開しました。



研究開発サイトの報告



GHIT Fundは、マラリア、結核、顧みられない熱帯病(NTDs)の研究開発(R&D)への助成(投資)を行う国際機関として、低中所得国の研究機関やアカデミア、医療機関、製薬企業との協業を推進しています。これは、2023年度から始まった「GHIT 3.0」の主要な戦略目標の一つです。2025年度は、GHIT Fundの社員がマラリア、デング熱などの流行地域へ赴き、研究開発の現状と現地の医療機関の活動を視察しました。

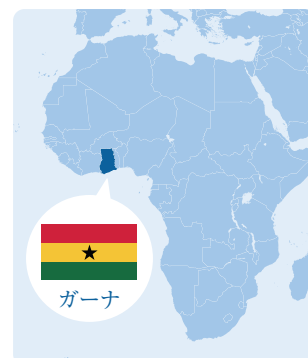
Report

I

ガーナ

現地のニーズに根ざした
研究開発の必要性を実感

2025年7月、低中所得国とのより強固なパートナーシップ構築を目指し、GHIT FundのCEO國井修と投資戦略チームのマネージャー佐藤達彦がガーナを訪問しました。ガーナ大学野口記念医学研究所やケープ・コーストの研究拠点、現地の学校や診療所、在ガーナ日本国大使館、公益財団法人味の素ファンデーションによる母子栄養改善の取り組みなどを、愛媛大学プロテオサイエンスセンターマラリア研究部門の方々の協力のもと視察し、マラリア研究の現状を確認しました。



吊りはかりでの体重測定

首都アクラから離れた地方の医療機関の視察では、手書きによる検査データなどの記録や、子どもの体重を「吊りはかり」で測定するなど、アナログな方法が用いられており、また医療機関では医療機器や医薬品が不足するなど、地域での医療格差が見て取れました。

マラリアによる死者の約8割が免疫力の弱い5歳未満の子どものことから、家庭や地域社会におけるマラリア予防は非常に重要です。現地の学校を訪れ、迅速診断薬のフィールドワークが行われる様子や、子どもたちの血液サンプルを採取する様子を見学しました。世界保健機関(WHO)によると、2024年にはガーナ国内で年間推定674万人がマラリアに感染し、約11,500人が死亡したと報告されています^{*}。近年、無症状のマラリア感染者が感染拡大のリスクとなっているため、超高感度な診断薬の開発による無症状マラリアの診断や治療効率の向上によって、感染防止への貢献が期待されています。



現地の学校での迅速診断薬のフィールドワークが行われる様子



ガーナ大学野口記念医学研究所

また、ガーナは野口英世博士が黄熱病研究の志半ば、1928年に命を落とした地です。日本政府により博士の功績を記念して、対アフリカ医療支援の象徴的な研究施設としてガーナ大学野口記念医学研究所が建設されました。同研究所は40年以上にわたり、日本の研究機関との共同研究を通じ、現地の感染症制圧を目的とした活動を続けています。

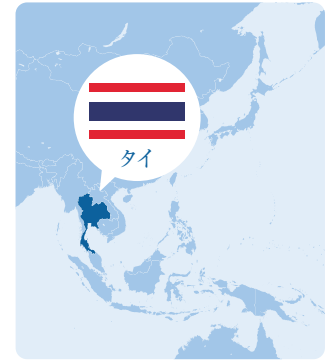
アクラ市内では、味の素ファンデーションの協力のもと、ガーナ政府保健サービスの施設や医療機関での活動を視察しました。ガーナでは、感染症だけでなく、国民の死亡・障がいを引き起こす最大の危険因子として、栄養失調が深刻な保健課題となっています。栄養失調は、胎児・乳幼児の身体と脳の成長を遅らせる発育阻害の要因となる上、マラリアの重症化リスクを高める貧血も引き起こします。さらに、5歳未満の乳幼児や妊婦はマラリアによる健康被害が特に大きいと、栄養状態・貧血・マラリアに対する統合的なアプローチが求められています。医療面の支援に加え、栄養面での支援もまた、マラリア制圧に不可欠であることを認識しました。GHIT Fundは今後も、アフリカ諸国の研究機関との強力なパートナーシップにより、現地のニーズや状況を踏まえた研究開発を積極的に支援していきます。



母子への栄養改善指導

Report II タイ

マラリア流行地域で視察した 現地医療の実情や研究の進展



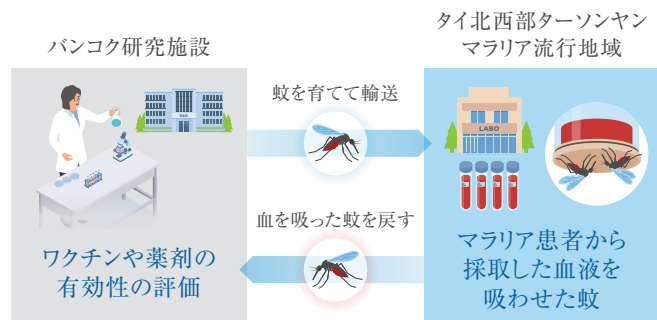
2025年10月中旬、GHIT Fund エクスターナルアフェアーズ & コーポレートディベロップメントのシニアマネージャー堀内聡とマネージャー柴田大樹は、マラリア・デング熱に関する感染症の現場や感染地域の現地のコミュニティ、医療機関の状況を知ることが目的に、当基金のパートナーであるタイのマヒドン大学熱帯医学部を訪問しました。バンコクの研究施設では蚊媒介感染症の制圧を目指す研究を視察し、ミャンマー国境付近ターソンヤンでは現地の僻地クリニックで提供される医療の実態や、地域コミュニティにおけるマラリア・デング熱対策の現状を確認しました。



研究用に飼育しているボウフラから生育された蚊

三日熱マラリアは、タイをはじめとする東南アジアを中心に広く流行している熱帯感染症で、肝臓内で休眠した原虫が再発を繰り返すため、根絶が難しい病気です。この休眠寄生虫は、その後再活性化して症状の再発を引き起こすだけでなく、再び蚊に感染することで、地域社会にマラリア伝搬を持続させる要因となるため、長期的な対策が鍵となります。GHIT Fundはマヒドン大学、チュラロンコン大学、愛媛大学が共同で進める三日熱マラリアワクチン開発プロジェクトを支援しています。

マヒドン大学熱帯医学部は、マラリアやデング熱、住血吸虫症など、様々な熱帯病の研究で国際的に知られています。バンコク市内の研究施設には蚊の飼育施設「Insectary」があり、研究用の蚊を育成・管理し、マラリアの流行地域のターソンヤンで研究の管理下のもとマラリア患者の血液サンプルを吸血させます。マラリア原虫の発育や感染の仕組みを解析し、ワクチンや薬剤の有効性を評価しています。



採取したボウフラを持ち帰るMVRUの研究者

ターソンヤンは、バンコクから約600キロ離れたミャンマー国境に位置するマラリア流行地域で、カレン族を中心とする少数民族コミュニティや複数の難民キャンプが点在しています。マヒドン大学 Vivax Research Unit (Mahidol Vivax Research Unit: MVRU) は、ターソンヤンを主要な研究拠点として、マラリアに関する多角的な研究を進めています。現地では、マラリア患者の血液を実験用の蚊に吸わせて、マラリア原虫の発育過程や感染伝搬の仕組みを研究し、再発予防薬やワクチン開発に必要な基礎データを収集しています。

視察では、カレン族コミュニティ、ターソンヤン病院、ミャンマー国境のクリニックを訪問しました。現地では、蚊帳や感染症予防を呼びかけるポスターの掲示やボランティアが運営するマラリア・ポスト(簡易診療所)が点在し、地域に初期医療体制が根づいています。今回の視察を通じ、GHIT Fundは現地医療の実情や研究の進展を直接確認し、感染症の制圧や医療格差は正に向けた持続的な支援の必要性を再認識しました。今後も現地パートナー機関との連携を通じて、マラリアやデング熱をはじめとする感染症の制圧、低中所得国における医療へのアクセス改善、公衆衛生の向上に貢献してまいります。



地域住民の血液サンプルの採取風景



2025年度の活動ハイライト

2025年9月

さらなる支援の輪を広げる 3つの個人寄付を網羅した 専用ウェブサイトを開設

2025年、GHIT Fundはグローバルヘルス分野においてさらなるパートナーシップを促進し、顧みられない感染症への取り組みを加速していくため、ご寄付を受け付ける新たな仕組みを導入しました。これまでの法人寄付に加え、以下の3つの方法で個人の皆さまからのご寄付、ご支援が可能となりました。

1. ふるさと納税制度を活用したご寄付（東京都・港区版ふるさと納税制度「団体応援寄付金」）
 2. 遺言によるご寄付や相続財産からのご寄付（遺贈寄付）
 3. クレジットカード決済または銀行振込による直接のご寄付
- GHIT Fundの取り組みを、より多くの皆さまにご理解いただき、ご寄付・ご支援にご活用いただけるよう、専用ウェブサイトも開設しました。

いただいたご寄付は、開発途上国にまん延する感染症の治療薬、ワクチン、診断薬の研究開発などGHIT Fundの事業活動および運営費に大切に活用させていただき、今後も支援の輪を拡大してまいります。



専用ウェブサイト



2025年6月・11月

第11回・第12回 プロポーザル作成セミナーを開催



GHIT Fundの投資（助成）プログラムへの申請書類（プロポーザル）作成に関する理解を深めていただくため、「標的研究プログラム」と「製品開発プログラム」に焦点を当て、公募の概要、プロポーザル作成時の重要なポイントなどを解説した「プロポーザル作成セミナー（Zoom Webinar）」を開催しました。

2025年度は6月と11月に開催し、各回とも企業・大学・研究機関・NGO/NPOなど、GHIT Fundの投資（助成）事業に関心をお持ちの方々や、プログラムへの申請を検討されている方々に多数ご参加いただきました。

第12回プロポーザル作成セミナー動画

※動画の音声は英語のみ。内容は開催当時のものとなります。



2025年8月

Forbes JAPANタイアップ 対談企画で大塚製薬と語る 「グローバルヘルスの未来」

Forbes JAPAN BRANDVOICE

GHIT Fund CEOの國井修と世界を舞台に活躍する企業のリーダーが、対話を通じてグローバルヘルスの課題解決や日本が担うべき役割を紐解く連載企画が「Forbes JAPAN BrandVoice」に掲載されました。

結核の治療薬開発に長年携わり、大塚製薬が2014年に約40年ぶりに開発した新薬「デラマニド」にも尽力、今もプロジェクトを率いている大塚製薬 医薬品事業部 執行役員 医薬研究統括補佐の川崎昌則氏をお迎えし、結核撲滅とグローバルヘルスの未来について、國井と対談を行いました。

川崎氏は大塚製薬が掲げる企業理念「世界の人々の健康に貢献する革新的な製品を創造する」を胸に、新薬開発までの道のりについて、また國井はパートナーシップが生み出す触媒作用と製品開発の加速化について熱く語り合いました。そして未だに年間1,080万人が世界中で発病し125万人が命を落とす結核の撲滅を目指す創薬研究への思いや、課題解決に向けて今後も共に歩んでいく考えを共有しました。

※所属・役職は取材当時のものです。



Photographs by Tomohisa Kinoshita



インタビューはForbes JAPAN特設ウェブサイト
でご覧いただけます。



2025年10月・11月

「JACLaS EXPO」「BioJapan」 「ASTMH」などの展示会出展で 国内外ネットワークを強化



2025年10月～11月、GHIT Fundの事業内容の理解やパートナーシップの強化を目的に国内外の展示会に出展しました。

10月は、パシフィコ横浜で開催された、日本最大の臨床検査分野の展示会「JACLaS EXPO 2025 -臨床検査機器・試薬・システム展示会-」、また世界で最も歴史のあるバイオテクノロジー展「BioJapan 2025」の2つの展示会に出展。さらに11月にはカナダ・トロントで開催された世界最大級の熱帯感染症の国際学会「American Society of Tropical Medicine and Hygiene (ASTMH)」へ参加し、グローバルなつながりの強化に挑みました。

各会場では、パネル展示やパンフレット配布を通じて、マラリア・結核・顧みられない熱帯病(NTDs)の研究開発プロジェクトへの投資(助成)の進捗状況や、国内外の企業、海外の大学や国際機関などとのパートナーシップについて紹介しました。GHIT Fundの投資(助成)プログラムの理解促進に注力し、パートナーシップの強化を図るとともに、国内外の産官学ネットワークの拡大につなげました。

2025年度の活動ハイライト

2025年10月・2026年2月

國井修のグローバルヘルス談義 「SDGs Talk」ゲストに藤巻亮太さん、 普天間かおりさんを迎えて

國井修のグローバルヘルス談義『「SDGs Talk」—あの子たちを死なせない—』は、顧みられない熱帯病（NTDs）をはじめとする「見過ごされてきた」病気の現状を、幅広いオーディエンスに伝えることを目的とした動画シリーズです。2025年度は、ミュージシャンの藤巻亮太さん（レミオロメン）とシンガーソングライターの普天間かおりさんを迎え、音楽を通じて「No One Left Behind（誰一人取り残さない）」というSDGsの理念を発信しました。

第5回では、藤巻亮太さんが故郷・山梨県における「住血吸虫症」撲滅の歴史に触れながら、今も世界で多くの人々がこの疾患に苦しんでいる現状と、「取り残される」ことのない社会の重要性について國井との対談を深めました。また、國井との会話から想起され制作に至った楽曲『儂く脆いもの』を、国や時代を超えて受け継がれる命の尊さへの想いを込めて、特別なアコースティックバージョンで弾き語りし、対談に花を添えました。

第6回では、沖縄出身の普天間かおりさんと、沖縄でまん延していた戦後マラリアやリンパ系フィラリア症について語りました。対談の締めくくりとして披露された『守りたいもの』では、大切な命や人々の暮らしを守る取り組みへの想いが歌にのせて伝えられました。

本シリーズは、このようなアーティストとの連携を通じて、NTDsをはじめとする「見過ごされている」疾患に関する情報をYouTube等のソーシャルメディアを介して幅広い層に届けています。グローバルヘルス課題への認知向上と、GHIT Fundの活動理念である「誰一人取り残さない」社会の実現に向けた啓発の一助となっています。



2025年8月

ゲイツ財団主催 「Japan Global Health Innovation Dialogue」を後援



Gates Foundation

2025年8月、ゲイツ財団主催の「Japan Global Health Innovation Dialogue: Harnessing Japanese R&D for Transformative Change」にGHIT Fundが後援として参画し、CEOの國井修が登壇しました。

本イベントは、ゲイツ財団と日本の多くの研究者が一堂に会し、日本の研究開発力やパートナーシップの可能性を探求する機会となりました。イベントでは、マラリア、診断薬、ワクチンの3つのテーマ別セッションが設けられ、日本の技術を世界のニーズとどう結びつけるかなど、今後の連携の可能性について深い議論が行われました。

同日夜には「Innovation in Action: Harnessing Japan's R&D Potential for Global Health」が開催され、政府、アカデミア、企業関係者など300名以上が参加しました。1日を通して、今後の継続的な交流や発展、具体的な連携に向けたネットワークの基盤が構築されました。

2025年9月

タイの研究機関との 対話を通じて、PDP支援への 理解を深める

GHIT Fundの投資戦略部門の浦辺隼、小山恵理子、チュイ セシリアが、タイの研究機関との交流および現地のニーズや研究開発状況の把握を目的にタイ・バンコクを訪れました。研究開発に取り組む製品開発パートナーシップ(PDP)を支援する官民の資金提供機関による非公式ネットワークであるPDPファンダーグループでは、ファンダー間の連携や製品開発の動向の共有、情報交換を促しています。

今回は、タイのChula Vaccine Research Centerやマヒドン・オックスフォード熱帯医学研究ユニットなどの現場を訪れ、研究開発の実情やエコシステム、地域特有の課題を直接理解し、効果的な支援のあり方を探求する機会となりました。これらの交流を通じてGHIT Fundは、ASEANを含む世界中のコミュニティに製品が届くよう、持続可能で協調的なグローバルヘルスの製品開発支援に取り組む重要性を再確認できました。



2026年1月

「第三回 顧みられない 熱帯病コンテスト」を支援



GHIT Fundが支援する「第三回 顧みられない熱帯病コンテスト」は、日本在住の中学生から大学院生を対象に、顧みられない熱帯病(NTDs)への理解を深め、行動を促すことを目的として、2023年から毎年開催されている取り組みです。GHIT Fundは世界NTDの日・日本実行委員会の一員として、3年連続で本コンテストを支援し、「GHITパートナーシップ&イノベーション賞」の授与や審査、選考にも携わりました。応募は合計37チーム75名から寄せられ、SNS審査期間中には作品動画が8,000回以上再生されるなど、多くの人がNTDsを知るきっかけとなりました。

2026年1月30日の「世界NTDの日」にはウェビナーイベントが開催され、コンテストの表彰式とともに、AIやテクノロジーがNTDs対策にもたらす可能性をテーマにしたパネルディスカッションが行われました。NTDs分野における次世代技術への期待と、若い世代の継続的な関心や行動意欲の高まりが示されました。

第3次5カ年計画「GHIT 3.0」前進への着実な道のり

Strategic Plan FY2023-FY2027

R&D 研究開発の推進と製品化の実現

R&Dのマイルストーン

2028年3月までの達成目標

2026年3月までの達成状況

目的

リード化合物探索

5件

リード化合物探索への投資

3件

非臨床試験

12件

非臨床試験への投資

10件

製薬業界、学术界などによるイノベーションのさらなる推進

1 イノベーションの加速

GL  PID-R

従来の投資対象であるマラリア、結核、顧みられない熱帯病（NTDs）に加え、新たに新興・再興感染症へとスコープを拡大。2025年度のエムボックス検査薬のプロトタイプ開発を含め、GHIT 3.0 が開始して以来、これまでに累計6件の投資を行いました。また、同分野の研究開発への資金提供に関する国際連携ネットワークである「GloPID-R (Global Research Collaboration for Infectious Disease Preparedness)」に参画するなど、新興・再興感染症に関わる体制の強化を図っています。

2 製品開発の投資インパクトを最大化



マラリア、結核、顧みられない熱帯病（NTDs）およびパンデミックの可能性を有する疾病を対象とした研究開発への共同資金提供（共同投資／Co-Funding）の機会創出などを目的に、タイ科学・研究・イノベーション推進機構（TSRI）とパートナーシップを強化する覚書を締結しました。これにより、GHIT Fundが投資するタイ国内の大学、研究所、企業等の研究機関およびタイで研究開発を行う日本を含む国内外の研究開発パートナーに対し、TSRIが追加的な資金支援の機会が拡大されます。



GHIT
3.0





2025年度は、GHIT Fund第3期の折り返し地点であり、これまでの取り組みの成果が着実に結実した1年となりました。累積投資額が400億円を上回り、協業パートナーが210機関以上とネットワークをさらに拡大したことは、これまでの成果が次の成長に向かっていく証です。引き続き、GHIT Fundが掲げる戦略の3本柱「イノベーションの加速」「製品開発の投資インパクトを最大化」「パートナーシップで生み出す化学反応」を軸に持続的な発展を目指してまいります。

2026年3月31日時点



3 パートナーシップで生み出す化学反応



現地のニーズに迅速に応えるためには、製品開発パートナーとの協業が不可欠です。就学前児童を対象とした住血吸虫症の治療薬の開発においては、国内外のパートナーが結集しプロジェクトを推進しました。その開発の軌跡、保健医療へのアクセスの向上への取り組みと協働の重要性を、アステラス製薬のサステナビリティウィークの一環として同社の社員の皆さんと共に分かち合いました。世界各地の技術力とパートナーシップが生み出すイノベーションを結集し、誰もが必要な医療にアクセスできる健康の公平性の実現を目指し続けます。



GHIT 3.0の3年目を終える2026年2月、設立当初からGHIT Fundが支援を続けてきた就学前児童向けの住血吸虫症の小児用製剤が、タンザニアでも実装研究として2～5歳の子どもたちに届きました。日本政府が支援し、国連開発計画が主導する新規医療技術のアクセスと提供に関するパートナーシップ（ADP）によるこのプログラムは、小児用プラジカンテル・コンソーシアムやGHIT Fundとの協業、パートナーシップによって実現した良い事例です。

Photo credit: UNDP/Kumi Media.

戦略の
3本柱



財務報告

2025年度決算書概要

※本項の金額は決算報告書をもとに、表示単位未満を四捨五入しています。

貸借対照表

資産の部	百万円
流動資産	70.5
固定資産	12,039.9
資産合計	12,110.4
負債の部	百万円
流動負債	73.2
固定負債	7.4
負債合計	80.6
正味財産の部	百万円
指定正味財産	12,029.8
一般正味財産	-
正味財産合計	12,029.8
負債及び正味財産合計	12,110.4

本概要は、有限責任監査法人トーマツの監査に基づくGHIT Fundの監査済財務諸表（第14期令和7年4月1日～令和8年3月31日）から抜粋したものです。GHIT Fundは、公益社団法人として日本国内に登録されています。

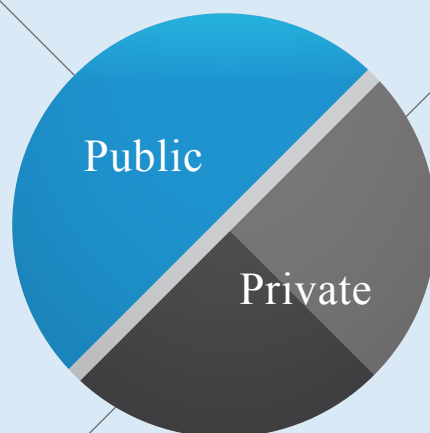
資金拠出パートナー&スポンサー

Full Partners

外務省
厚生労働省
国連開発計画

Full Partners

ゲイツ財団
ウェルカム



Full Partners

アステラス製薬株式会社 / 中外製薬株式会社
第一三共株式会社 / エーザイ株式会社
塩野義製薬株式会社 / 武田薬品工業株式会社

Associate Partners

富士レビオ・ホールディングス株式会社
大塚製薬株式会社

Affiliate Partners

富士フイルム株式会社 / 協和キリン株式会社
Merck KGaA / レメディ・アンド・カンパニー株式会社
住友ファーマ株式会社 / 田辺ファーマ株式会社

Sponsors

株式会社パーソン・ジャパン / Coefficient Giving / Diligent Japan合同会社
栄研化学株式会社 / Forbes JAPAN / 森ビル株式会社 / モリソン・フォースター法律事務所
株式会社セールスフォース・ジャパン / ZVC JAPAN株式会社

正味財産増減計算書

一般正味財産増減の部		百万円
経常収益		
受取補助金等		5,289.7
受取寄附金		720.5
為替差益		86.4
雑収益		23.3
経常収益計		6,119.9
経常費用		
事業費		5,925.4
管理費		194.1
経常費用計		6,119.5
経常外費用		
固定資産除却損		0.4
経常外費用計		0.4
指定正味財産増減の部		百万円
受取補助金等		
受取助成金(政府、国際機関等)		4,350.8
受取助成金(財団)		1,554.9
受取地方公共団体補助金(区)		0.2
受取寄附金*		1,061.2
指定正味財産合計		6,967.1

※受取寄附金には民間企業からの寄付に加え個人の支援者の皆さまからの直接寄付が含まれております。

財務報告

2025年度、GHIT Fundにお寄せいただいた補助金やご寄付は、69.7億円となりました。これらの資金は、マラリア、顧みられない熱帯病(NTDs)、結核など、治療や予防のための製品が十分になく、世界から見過ごされている疾患領域の研究開発プロジェクトへの投資および運営費に活用しています。2025年度は、20件の新規プロジェクトが採択されました。2025年3月末時点で、42件の研究開発プロジェクトを推進しており、低所得国における医療アクセスの改善に向けた新薬候補の創出や臨床開発の進展を目指しています。

また今年度は、特設ウェブサイトの開設やパンフレットの作成を通じて、東京都・港区版ふるさと納税制度「団体応援寄付金」、遺贈、直接寄付の3つの仕組みに関する周知、

広報活動を実施し、個人寄付の受け入れ態勢を強化しました。港区のふるさと納税制度「団体応援寄付金」を通じた補助金*として189,000円、また、直接寄付による寄付金78,000円を受領しました。

個人の支援者の皆さまからのご寄付は、GHIT Fundの活動への共感と期待の表れであり、今後の活動基盤を広げる重要な支えとなっています。皆さまからいただいたご寄付および補助金は、開発途上国にまん延する感染症の治療薬、ワクチン、診断薬の研究開発の支援などのGHIT Fundの事業活動および運営費に大切に活用させていただきます。

※2024年1月から12月の間に、寄付者がGHIT Fundを応援したい団体として指定し港区に寄付した寄付金のうち、2025年度に港区からGHIT Fundへ交付された補助金の金額。

リーダーシップ

評議会

GHIT Fundに資金を拠出している日本政府、財団、民間企業により構成され、評議会と理事会メンバーの選任または解任、定款の変更、決算書類の承認など、法令または定款に定められた重要事項の決議を行います。



中村 亮

外務省
地球規模課題審議官(大使)



江副 聡

厚生労働省
大臣官房 国際保健福祉交渉官



トレバー マンデル

ゲイツ財団
グローバルヘルスプログラムプレジデント



ヨン=アルネ ロッティンゲン

ウェルカム
CEO



アステラス製薬株式会社

安川 健司
代表取締役会長



エーザイ株式会社

内藤 晴夫
代表執行役CEO



塩野義製薬株式会社

手代木 功
代表取締役会長兼社長 CEO



第一三共株式会社

眞鍋 淳
代表取締役会長



武田薬品工業株式会社

クリストフ ウェバー
代表取締役社長 CEO



中外製薬株式会社

奥田 修
代表取締役社長 最高経営責任者(CEO)

理事会

グローバルヘルスマネジメントの領域で豊富な経験を持つエキスパートにより構成され、リーダーシップチームの業務を監督し、重要な規程、中期戦略・年次計画および予算、投資案件の承認など業務執行に係る重要事項の決議を行います。



会長・代表理事

中谷 比呂樹

慶應義塾大学医学部
訪問教授



副会長

マヒマ ダトラ

バイオロジカル・イー・リミテッド社
マネージングディレクター



専務理事

國井 修

GHIT Fund CEO



カライシャ アブドゥル カリム

南アフリカ・エイズ研究プログラムセンター(CAPRISA)
共同創設者兼次長
コンボピア大学メールマン公衆衛生大学院教授(疫学)
クワズル・ナタール大学副学長代理(アフリカ保健)



ラジーヴ ヴェンカヤ

元武田薬品工業株式会社
グローバルワクチン事業部プレジデント
元ホワイトハウスバイオディフェンス担当
大統領特別補佐官
元ビル&メリンダ・ゲイツ財団ワクチン供給ディレクター



喜多 洋輔

外務省
国際協力局
国際保健戦略官



高橋 順一

厚生労働省
大臣官房国際課 国際保健・協力室長



門間 大吉

株式会社国際経済研究所
副理事長



監事

白畑 尚志

元PwC Japan有限責任監査法人パートナー
株式会社IDホールディングス社外取締役
株式会社イトーキ社外監査役
株式会社コメダホールディングス社外取締役(監査等委員)



監事

中村 さおり

平山・流矢・白井法律事務所
弁護士



監事

ビーチャー メイソン

上場企業の独立社外取締役および
国際仲裁人



オブザーバー

ニコラス キヤムック

ウェルカム
感染症製品開発パートナーシップ
部門責任者



オブザーバー

イザベル トーレス

ゲイツ財団
グローバルヘルス部門
インダストリー・リーダーシップ・エンゲージメント担当
シニア・アドバイザー

選考委員会

治療薬、ワクチン、診断薬における研究開発において豊富な知識と経験を持つ国内外のエキスパートにより構成され、プログラム申請者からの申請書および進捗報告書の審査・評価を行い、その結果に基づいて、理事会に対して投資案件を推薦します。なお投資プログラムとの利益相反の可能性を排除するため、選考委員会には民間企業の役員員を含んでいません。



選考委員長
小山 裕雄

国立研究開発法人 理化学研究所
環境資源科学研究センター
創薬化学基盤ユニット ユニットリーダー



選考委員長
フィリップ ジョーダン

オックスフォード大学イノベーション
プリンシパル・ライセンシング&
ベンチャー・マネージャー



上村 尚人

大分大学医学部臨床薬理学講座 教授



クリス カープ

ゲイツ財団
グローバルヘルス・ディスカバリー&
トランスレーショナルサイエンス
ディレクター



スー アン コスタ クレメンズ

オックスフォード大学 小児医学部小児感染症
グローバルヘルスおよびワクチン学教授
シエナ大学グローバルヘルス研究所所長



齋藤 昭彦

新潟大学大学院医歯保健学研究科 研究科長
小児科学分野(新潟大学医学部小児科)教授
新潟大学医学部 副医学部長



アナ カリン ティデン

創薬化学／創薬コンサルタント



アン ミルズ ドウガン

コンサルタント



サリー ニコラス

ウェルカム
保健システム・環境部門 責任者



矢島 理恵子

スタンフォード大学医学部
SPARKプログラムトランスレーショナルリサーチ
創薬イノベーションディレクター



ポール ヨルゲンセン

コンサルタント

リーダーシップチーム

事業や投資戦略の策定、理事会の承認に基づいた戦略の遂行、管理業務の実施、および組織の成長を促進します。



國井 修
CEO



芳賀 圭子
COO



浦辺 隼

投資戦略
アソシエイトヴァイスプレジデント(部門長)



酒井 伸

法務・投資リスクマネジメント
アソシエイトヴァイスプレジデント



関 一恵

エクステルナルアフェアーズ &
コーポレートディベロップメント
ディレクター



高澤 美保

コーポレートオペレーションズ
シニアディレクター



麦谷 英理子

ブランドコミュニケーション
ディレクター

資金拠出パートナー & スポンサー

GHIT Fundの投資事業や組織運営は、資金拠出パートナーやスポンサーの多大な支援によって成り立っています。
皆さまからのご支援ご協力に心より御礼申し上げます。

Full Partners



外務省



厚生労働省



国連開発計画



ゲイツ財団



ウェルカム



アステラス製薬株式会社



中外製薬株式会社



第一三共株式会社



エーザイ株式会社



塩野義製薬株式会社



武田薬品工業株式会社

Associate Partners



富士レボ・
ホールディングス株式会社



大塚製薬株式会社

Affiliate Partners



富士フイルム株式会社



協和キリン株式会社



Merck KGaA



レメディ・アンド・カンパニー
株式会社



住友ファーマ株式会社



田辺ファーマ株式会社

Sponsors



株式会社バーソン・ジャパン



Coefficient Giving



Diligent Japan合同会社



栄研化学株式会社



Forbes JAPAN



森ビル株式会社



モリソン・フォースター
法律事務所



株式会社
セールスフォース・ジャパン



ZVC JAPAN株式会社

2026年3月31日時点

パートナーシップで感染症と闘う国際機関



組織概要

名 称	公益社団法人グローバルヘルス技術振興基金 Global Health Innovative Technology Fund
所在地	〒106-0032 東京都港区六本木一丁目9番10号 アークヒルズ仙石山森タワー25階 TEL:03-6441-2032 FAX:03-6441-2031
設立日	2012年11月6日(2013年4月より事業開始)
会 長・代表理事 CEO・専務理事	中谷 比呂樹 國井 修
事業内容	1. 開発途上国向け医薬品開発におけるグローバルな連携の推進 2. 医薬品開発のグローバルな連携への投資 3. 日本のグローバルヘルス分野における国際貢献の推進と強化
ウェブサイト	https://www.ghitfund.org/jp

パートナーシップで感染症と闘う



Global Health Innovative Technology Fund

公益社団法人グローバルヘルス技術振興基金

〒106-0032 東京都港区六本木一丁目9番10号 アークヒルズ 仙石山森タワー 25階 TEL: 03-6441-2032 FAX: 03-6441-2031 www.ghitfund.org/jp

Copyright © Global Health Innovative Technology Fund / 2026.06